特集

土に還るということ

自然に還る、土に還るということを ご一緒に考えてみませんか。

「地に足をつけて」という表現は、よく聞かれる言葉です。

元来、農耕民族として生きていた日本人は、大地をこよなく愛する民族と言えるでしょう。「死んだら土に還る」というのもそのひとつで、還るという表現には「大地と一体になる」「人も自然の一部である」という思想が色濃く漂っているようです。

しかし、最近では「土に還る」ことも難しくなってきました。お墓を建てること、建てた後に子孫がお墓を守ることの困難さは、近ごろ社会問題にもなるほどです。

核家族があたりまえになり、急速に都市化する現代では、葬儀を行うことやお墓を守ることについての考えも多様化しているようです。

「葬儀もやらない、お墓もいらない」とおっしゃる方も増えてきました。しかし、墓地とは故人のものというより、身内を亡くした遺族の悲しみや喪失感を癒す「心のよりどころ」としての役目もあるのではないでしょうか。むしろそこへ行けば、故人と出会える、冥福を祈ることによってやすらぎを得られるという意義の方が強いかもしれません。不思議なもので、墓参すると心が浄化されるような、精神が生まれ変わるような体験をした人も多くいらっしゃるようです。やはりお墓とは、生きている人々にとって「心を癒す場所」なのではないでしょうか。

しかし、一方で墓地不足や墓守の問題があります。これからの人々が安らかに「土に還る」ためにはどうすればよいのでしょうか。

●合葬墓という新しいスタイル

現代の墓地事情を解消するために、見直されているのが「合葬墓」です。お墓が「先祖代々」（家）から故人（個）を偲ぶものという価値観を持つようになり、お墓は家の象徴ばかりとは言えないように思います。

合葬墓なら、「土に還る」という古来からの日本人の死生観を受け継ぎ、故人に近しい人々がいつでも好きな時に訪れることができます。だれもが手厚く葬られ、残された人々も墓地の管理を思い煩うことなく安心して任せられます。

こうした合葬墓のひとつ「がっしょう園」が長居の一角に近く誕生することになりました。都心の恵まれた立地で、だれもが気軽に訪れることのできる「安住の地」。そこへ行くと心が落ち着き、大好きだった今は亡き人たちと対話できる癒しの無憂空間。

21世紀になっても多分変わることのない日本人の心に「がっしょう園」はひとつのスタイルを提示しています。

イメージパース

お墓のミニ知識

ネアンデルタール人の時代にも葬送があった。

遺跡の発掘調査から、6万年～10万年も昔のネアンデルタール人も葬送を行っていたことがわかっています。そしてその際に、死体の周りに石器や動物の骨などの副葬品を一緒に埋葬していました。現代においても故人の愛用の品や思い出深いものを棺の中に入れますが、これと同じような心情をネアンデルタール人も持っていたのでしょうか。一人で冥途に旅立つのは可哀そう、こんな思いは10万年を経ても変わらない人間の「心」なのかも知れません。

……

「墓」という字をよく見てみると…。

墓の語源はよくわかっていません。しかし、墓の字をよく見ると「日」のあたる「草」むらの「大」地に横たわり、「土」に還る…という意味を持つ字が組み合わさって作られていることがわかります。漢字ひとつとってみても、日本人が人は最後に土に還るという自然観を持っているようですね。

◆参考文献／「お墓、どうしますか？」ダイヤモンド社より

合葬墓への思い

臨南寺　住職
渡邊　剛毅

寺というと墓参りや葬儀を思い浮べる方が多いようです。しかし、一方で寺は地域の核であり、願い事をしたり不安を取り除いたり、そればかりか家のもめ事の相談や地域のいざこざの解決など、暮らしの「よろず悩みの相談所」という役割も持っております。本来はいつでも、だれでも気軽に立ち寄れる場所なのです。

最近、お寺に訪れる方のお話を伺っていますと、葬儀や埋葬、墓地に対する考え方が大変多様になり、従来の家を単位とした墓にこだわっている方ばかりではないように思われます。

こういう時代に「合葬墓」は、ひとつの理想を提示しているのではないでしょうか。親の思い、子の思い、双方をくみとり、どちらにも納得のいく形を追求しています。子とて、事情が許せば親の墓参をしたいのはやまやま、というところでしょう。墓が家族の歴史を刻み、家族の絆を深めるものであることは昔も今も同じだと思われます。

今回「がっしょう園」を建立されることは、誠に時世にかなったことと賛同するとともに、この実現に向けてできるだけご協力をさせていただきたいと思っております。

「ほ～っと」創刊に寄せて

関西日印文化協会　理事
山田芳信

電車の中で席をゆずれない人や、道にガムやタバコをポイ捨てする人など、自分のことしか考えられない人が増えています。

世界ではIT革命や先端技術の発達で急速にグローバル化が進む中、経済摩擦や地球環境など、先行きに不安を抱かせる問題も深刻さを増している様ですし、国内においても、物質主義がはびこり、政治や教育の混乱といった心の荒廃を思わせる社会の様相が見られ、モラル社会全体の善悪の区別さえ曖昧になりつつあることも心配です。

このような社会において、私たちは常に相手に変わってほしいと思っていますが、本当に改革しなければならないのは自分自身ではないでしょうか。

さまざまな問題の根源は、つきつめていくと結局それにかかわる人の問題かと思います。その人の人間性が変われば、家庭も、職場も、社会も、国も、世界も変えることができるのではないでしょうか。

自分の心が静まって「ほ～っと」した時こそ、相手を思いやる心を忘れないようにしていきたいと思います。

書道家岩木星澄先生の「ほ～っと」は私たちの宝物

この「ほ～っと」の題字をどうしようかと考えている時に、ふと思い浮かんだのが岩木星澄先生の書でした。この春、天王寺美術館で先生の書に触れて、やさしさや力強さ、そして見る人を「ほ～っと」させるあたたかさに深い感銘を受けておりました。

先生の前で、発刊の経緯や、「ほ～っと」に対する思いをドドッと息急き切ったように熱く語ったあと、ふと見ると先生のやさしい眼差し…「私も自宅に仏壇があり、手を合わせるようにしています。宗教のことは詳しくは存じませんが、人と人とのふれあいややさしさが伝わればいいですね。私も及ばずながらお手伝いできることがあればおっしゃってください」とニッコリ微笑まれた時は〝天にも昇る〟喜びでした。この「ほ～っと」の字で皆様に〝ほ～っと〟一息ついていただけたら幸いです。この字を我が家の家宝にと思っているのは私だけでしょうか。（M）

親子坐禅会

夏休み親子坐禅会レポート

「心がシーッと静かになったよ」セミの声の響く夏、親子で坐禅体験。

「ふだん着でどうぞ」と呼び掛けた臨南寺での「夏休み親子坐禅会」。「足がしびれたらどうしよう」「うちの子、じっと坐っていられるかしら」という当初の声は、本堂に坐り目を閉じた瞬間から、みなさん消えていたようでした。

▼外はむし暑いのに、なぜか本堂の中はひんやり。
眠って、目を閉じて…きちんと胡坐をかいて手を組む子もいます。

大都市大阪での騒々しい日常の中、ホッとする時間は持てるのでしょうか。それは子供にとっても同じだと思います。『坐禅』というと足が痛いとか、いろいろ決まりがあって難しいとか、どこか堅苦しいイメージがあるように思います。今回の夏休み親子坐禅会では、そのようなイメージを払拭し、夏休みのよい思い出としていただければと開催いたしました。

静かなお寺で、ほんの短い時間ですが、まず坐禅の体験をしてみる。そして二学期が始まり「お寺に行って『坐禅』をしてきたよ」と友達に話していただければそれで良い。そんな思いです。また、ご両親の皆様には何かしら求めるものがあって参加された方もいらっしゃるかと思いますが、そんなことよりお寺の本堂でただ「坐った」だけでよいのではないかと思っております。

坐禅の前に合掌の仕方を少し教えたところ、帰り掛けに子供さんたちが爽やかに合掌してくださったこと感謝しております。

今後も機会がありましたら、静かに姿勢を正して坐ってみましょう。

合掌

臨南寺役僧
川岸　裕興

▲坐禅の後は、一番以上もある大きな紙に足や手でペインティング。お気にいりの色でペタペタ！体を使って遊ぶ遊びはみんな大好き！

体験トーク

坐禅さまさま

大阪市　**加藤　敬子**さま

シーンと静まる本堂の中、響き渡るのはセミの声と遠くに聞こえる車の音だけ…。そのセミの声が日頃は騒音しく感じるのに、この日は妙に涼し気で、夏の宝物といった感じでした。雑念のない時間は長く退屈なのではなく、ゆったり優雅だと思いました。

こどもたちにとっては少しとまどいもあったかと思いますが、何も考えないで五感だけを頼りに時を感じるのは、他では得られない貴重な体験ではないでしょうか。

私にも、こどもにも、坐禅は最高のリラクセーションだったと思います。よい体験を、本当にありがとうございました。

編集室から

やっとやっと出来上がった「ほ～っと」。なにぶん素人の私たちが初めて作るわけですから「あーでもない」「こーでもない」と試行錯誤の連続。出来上がっても、まだ何かしら物足りない気がします。

もっと皆様とコミュニケーションがとれるページがあった方がよい、写真がたくさんあった方がよい・・・等々、心残りがありますが、この1号から、皆様と一緒に育ててゆくことができればと思っております。

ともあれ、出来上がった「ほ～っと」を手に取り、ほ～っとしています。

「ほ～っと」第一号
平成12年10月
発行：梵伽林（りょうがりん）
〒558-0011 大阪市東住吉区長居公園1-32
☎0120-711493